風刺の教室

山田詠美

EIMI YAMADA

FÛSÔ NO KYOSHITSU

河出書房

山田詠美（やまだえいみ）
昭和三十四年、東京生れ。
明治大学文学部中退。
「ベッドタイムアイズ」で
昭和六十年度文藝賞受賞。
昭和六十二年度直木賞受賞。

風葬の教室

昭和六十三年三月十五日　初版印刷
昭和六十三年三月二十五日　初版発行

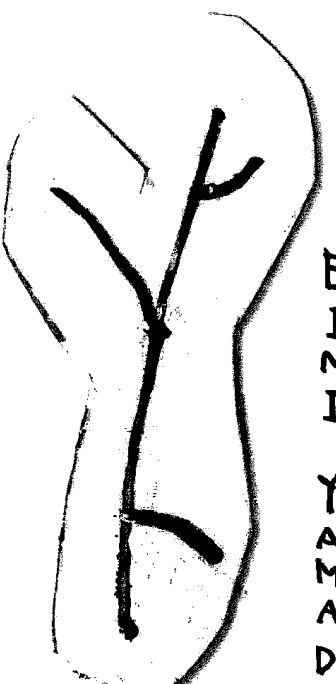
著　者　山田詠美
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替口座　（東京）〇―一〇八〇二

印刷　大日本印刷株式会社
製本　小高製本工業株式会社

©1988 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4 309 00502 0

風葬の教室



山田詠美

EIMI YAMADA

河出書房新社

目次

風葬の教室　5
こぎつねこん　129

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

風葬の教室

鳥獣戯画という素敵な絵を社会科の教科書で見たことがあります。先生が黒板に私の名前を書いています。きしきしと音がして、私の名前は、もう既に、先生のはくぼくに踏みにじられました。指定された上ばきを、まだ用意していなかったので、私は学校に来るお客さんが覆くスリッパを覆かされています。私は、本当はスリッパの中のばい菌が恐い。そればかりを気にして、下を向いて、足をもぞもぞとさせていると、先生は、幸福な思い違いをして、やさしく私の背筋を撫でてくれます。私は不思

議な気持の良さが体じゅうを走るのを感じます。鳥肌がふつふつとたってきて、泣き声をあげなくてはと思い、ようやく前を向きます。教壇の上は、とても見はらしが良い。私は、新しいお友だちの顔をぼんやりと見降します。その時、私は、突然、耳が聞こえなくなります。皆、笑ったり、つつき合ったりしているのでしょう。口を誰もが、ぱくぱくと動かしていて、おなかをすかせた雛鳥のように見えます。

五年三組の新しいお友だちです。本宮杏さんと、みんな仲良くしてあげてください。先生は私のことを皆にお願いします。本当は、先生は私に皆のことをお願いするべきではないのかな。私には、こんなに大勢の人々の中からお友だちを選べるのですから。けれど、皆には、そんな楽しみがないのです。私を受け入れるか拒否をするか、その二つの楽しみ

しかないのです。

もとみやあん、もとみやあん。誰もが、唇を私の名前に形作っています。今にも大合唱が聞こえてきそう。けれど、私は、ぼんやりとそこに立ち尽くしているだけです。私は、この人たちを嫌っていないのだから、皆、私のことも嫌いにならないといいなあ、と漠然と考えています。私は、嫌われないことが一番好きです。それが、とても楽なことだと思うからです。私は、私と同じ年齢の子たちに好かれるのが、とても面倒臭い。でも、嫌われるのはもっと嫌です。学校の生活がうまく運ばなくなりますから。学校での生活は眠る時間より長いのです。私ぐらいの年齢の子にとっては、一番、時間をかけていることが人生です。病気の子はベッドの中がその人の人生なのでしょうが、健康な私は、学校を人生に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

するしかないのです。

窓際の一番後ろに座ってちょうだいね、本宮さん。先生は、ポンと私の背中を叩きます。私は押し出されたシャボン玉のように、教壇を降りなくてはなりません。スリッパが脱げそうです。私は、足の親指を丸めて、それを防ぎながら床に降ります。弾みをつけて、教壇から飛び降りるのです。ぱん！　と床は鳴ります。その途端に、私の耳は、よく聞こえるようになります。

あんって変な名前だよね。かわいいじゃん。勉強できっかなあ。お友だちの声が一斉に私の耳に飛び込んで来るようになるのです。その瞬間、私は自分が、ああ、学校のものになった、と思い途方に暮れるのです。

私が新しい学校生活に出会うのは、いつも春ではありません。学年の

始まる春は、誰もが私と同じ立場なので、私には少しも新しい気持が起きません。私は、自分を特別だと感じません。特別でない自分を、いったい人はいつくしむことが出来るものでしょうか。

さいわいにして、私の父は転勤の非常に多い仕事に就いていたので、私は自分が他の大勢の子供たちと違うことを早くから知りました。自分と他人との区別をあっさりとつけてしまうことを学んだのです。

私が新しい学校に移るのは夏の終わりのことが多かったようです。一学期が終わり、私は教室の皆にさよならを言います。そして、うっすらと汚れた上覆きを持って家に帰ります。これを洗って、また学校に戻るという面倒のないことが私を少し幸せな気分にします。時々、泣くお友だちもいて、私を驚かせます。私は別れを悲しませる程のことを彼女た

ちにしてこなかったのに。私は、思うのですが、気持は少し解ります。私といつも一緒におトイレにいっていた女の子は、ひとりでいかなくてはならなくなるのです。このことは、考えようによっては両親を亡くした時くらいに困ることなのです。手紙書くからね、絶対お返事ちょうだいね。私は、その子の言葉にうん、うん、と頷きます。でも、私は、手紙なんてこないことを知っています。その子の日常生活に、もう私は組み込まれていないからです。友だちというのは、日常生活なのです。遠く離れたところまで、わざわざ用を足しに行く人など、どこにいるものですか。

夏休みの間に私と私の家族はよその土地に引っ越します。父や母は何やかやと雑用に忙しくしていますが、それが私にまでまわってくること

はありません。私は、この時、人生とは何の関係もない純粋な悦楽を味わう時間を持つことが出来るのです。私の夏休みは、何ものにも付属していません。ぽっかりと開いた空間です。私は、幸福です。前の学校の宿題もありません。新しい学校から、何をしておけと命令されることもありません。あの何の役にも立たない夏休みの図画工作に手を煩わせることもありません。

私は蟬の声を聞いて毎日を過ごします。都会から田舎に引っ越した時は、とくに自分の体が敏感になっていくのを感じます。私は、ひとりで、野原などを歩きます。そうすると、あまりの暑さに目の前は暗くなる。草や木から、音もたてずに湯気が立ちのぼっているのを感じます。そうして、色々な緑が私を見詰めるのです。それらは、私を小さな者だと思

っているようです。私は思わず立ちすくんでしまいます。蟬の声は私の汗をせかします。太陽は、たったひとつの黒い点である私の頭を焦がします。すべてが、ちっぽけな私に向かってくるように感じます。

空を青いと決めたのは誰でしょう。じっとりとした草木が私に寄り添う中で、私の天井は真っ赤です。私は、自分よりも、まわりの動かない物たちの方が、はるかに生きていると感じます。私は自分を何もないように感じます。私は汗をかいていますが、それが一体何でしょう。草の汁の味の方が、ずっと強いのです。暑さの中で呆然とたたずむ私に影法師はありません。私の父や母や姉や家や成績も、もう、この世界にはないのです。じんわりと新しい汗は滲みます。新しいからと言ったって新鮮なわけでは決して、ない。私は、この時、明らかに草や木に殺されて

いるのです。

ふらふらと私は歩き続けて、溜池のはしに座り込んだり、橋の欄干にもたれかかったりしながら、ようやく自分を取り戻して、昼さがりの墓地を優雅に通り抜けて、家に戻ります。

「まったく、もう！　自分の部屋は自分で片付けなさいよね」

「駄目よ、ママ、この子は放浪癖あんのよ。私、杏が橋のむこうの林のあたり、ふらふらしてたの見たことあるもの」

「あそこ、人さらい出るわよ。ひとりでうろついたら駄目よ」

母や姉の無頓着さは、私を涙ぐませる程です。彼女たちは、私が、つい先程まで、恐怖と恍惚とで記憶すら失ってしまっていたのを、まったく知らないのです。ああ、生き返った。私は溜息をつきます。家具の配

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.